SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№21
2024.12.20

ホームページはこちらから → https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/

自尊感情の適度なレベルとは

本号では、筑波大学人間系教授の小島道生先生にお話を伺います。

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

教員養成系の大学で障害児教育を学び、特別支援学校の免許を取りました。大学ではダウン症のあるお子さんの早期療育を行っていました。ダウン症のあるお子さんについては、乳幼児期から青年期まで関わる機会があり、私自身も支援の在り方を模索していたことから、卒業後は筑波大学大学院の博士課程（心身障害学研究科）に入学しました。

ダウン症のある人の自己制御という、抑制だけでなく主張することも含めた自分の行動について、どのようにコントロールしているかを博士論文のテーマにして研究に取り組みました。博士課程を修了してからは、兵庫教育大学、長崎大学、岐阜大学に勤務し、10 年前に筑波大学に戻ってきました。これまでの大学の授業では主に発達障害や知的障害の心理学を担当してきました。また、長崎では、離島を含めて巡回相談等に行く機会もあり、とても貴重な経験になりました。

現在の研究について教えてください。

知的発達障害のあるお子さんの自己理解や自尊感情の研究を続けています。発達障害、知的障害があるお子さんの自尊感情は測定が難しいことがあります。通常学級にいるお子さんは、周囲と比べてうまくできない、失敗経験を多くする、さらには周りの人と自分は違うとか、そうしたことに気づくなかで、診断名に対する自分のイメージと、理想とする自分との間で葛藤が生じることが多くなります。成人期の方を対象にした面接をしても、診断名があり特性はあっても、自分は普通に働けているから大丈夫というように、いわゆる「普通」でありたい自分の願いが強くみられることもあります。しかし、やはり様々な葛藤があり、支援に関わっていてもなかなか難しいものがあります。

自尊感情に関連する主観的幸福感について、青年期・成人期の当事者の方に尋ねてみたことがありますが、幸せだなと思っている方には、ある程度の共通点があります。一つには、経済的な自立が関係するのですが、その他には、仕事があって働き、好きな趣味や何かに打ち込める環境が整っているということです。また、本人から、職場の人や、誰かに助けられているというような言葉が出てくることがありますが、そうしたケースの場合、人とのつながりがうまくいき、良い状態が保たれていると感じることができます。反面、なかなかうまく適応できていない場合は、世間には頼れる人がいない、ややもすると周囲の人を敵だと感じてしまう部分があるように思います。出来ないことは人に頼って周囲とうまく繋がり、さらに感謝の気持ちを持てるようになれたら良いのですが。自分を認めてくれる人、受け入れてくれる仲間、あるいは家族でもいいのですが、分かってくれる誰かが、青年期・成人期になっても身近なところにいるというのは、大きな意味があります。そして、自分はまあまあいいんじゃないかというように、自己肯定感のレベルが少し高いくらいが、心理・適応的にはいいと思われます。

自尊感情が高い（低い）場合、認められなくなるとどんな行動が見られるようになるのでしょうか？

発達障害のある人の場合、うまくいかなかった時、その原因は自分ではないとか、運が悪いとか、テストだったら作った先生の問題が悪いとか、そんなふうに他者からの意見などを素直に受け入れることが難しくなったり、否定しがちになったりすることもあるかと思います。自尊感情が低い場合には、特に躓きのあるお子さんは、能力がないから、何をしても無駄みたいになってしまうこともあるので、そうならないように気をつけてみていくことが大事です。逆に自分の努力が足りなかったと考えるのは、それを自分の中でコントロールし、多少なりとも認識しているということですから、そんな見方ができるようになるといいのではないかと思います。

人と繋がり、人に感謝できることの幸せ

適応がうまくいかないような場合、どのような指導が望まれるのでしょうか？

自分の努力である程度は結果を変えられるというような自己成長を感じられる経験を幼い頃から積み上げることが大事です。例えば、100 マスは難しくても 10 マス計算でタイムがちょっとでも縮まるとか、正答率が増えるとか、成果を分かりやすく示していくという工夫が大切です。LD のある中学生でも、高校受験に向けて頑張っているお子さんもいます。幼い頃から水泳をしていて、記録が縮まったり、泳法も広がったりして、特別にすごい記録は出せないけれど、努力をすればある程度の結果が得られるという経験をしていました。限界はあったとしても、頑張れば結果が得られるという体験が将来につながっていくのではないかと思います。

また、生き甲斐や強みを見つることも大切です。強みとは、性格的な長所と言い換えてもいいかもしれません。例えば、誰に対しても分け隔てなく関われるのであれば、そういう面を大事にすることで将来的に多くの友達に恵まれることになるかもしれません。本人の性格的な強みを、周りがメッセージとして伝えていくと良いと思います。性格的な強みは持続性のある強みですから、それを生かしながら、就労や自分の向いている進路に繋げていけるようになるといいと思います。自分の中の強みをしっかりと伝えていくことが自尊感情や自分に対するポジティブなイメージを抱かせるためには大事です。

特別支援教育に携わる先生方へ一言メッセージをお願いします。

教師も適度に自尊感情が高くないと、子供に対して自尊感情を大切にした支援ができにくくなります。教師自身が、心理的なゆとり、やりがい、そうした充実感を抱けるような働き方ができれば、子供への支援もうまくいく可能性が高まります。学校はもっと働きやすい環境を作っていく必要があります。また、教師同士、教師と保護者、もちろん子供もそうですが、互いの考えを言う際の伝え方が大事です。ベテランの先生と、まだ経験の浅い先生が、それぞれの互いの良さを認め合えるとか、そうしたゆとり、教師の成長・発達も考慮した支え合える環境が大切だと思います。

インクルーシブの流れは強まっていますから、交流学習にとどまらずに、通常の学級で教科学習をしていくためにはどんなことが必要なのか、それぞれの専門性を生かして、打ち出していけるとよいと思います。また、当事者の人と一緒に、良い教育実践って何だろうと、当事者視点から提案ができるようになると良いと思います。当事者と研究者が一緒になって学校や社会への働きかけを行うという動きが、知的障害の分野でも世界的にはみられてきています。そうした動きが、卒業生も含めて広がるといいかなと思います。

（聞き手：連携推進グループ　橋本時浩　稲本純子）

附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取組がたくさんあります。

えがおカフェ　インスタグラム　→

みんなが笑顔になれる社会に
～附属大塚特別支援学校「えがおカフェ」の挑戦～

昨年度まで附属大塚特別支援学校で副校長を務められた大宮弘恵先生にお話を伺いました。

まずは、先生ご自身について教えてください。

平成元年に教員に採用され、35 年。まさかこんなに長く教員を続けているとは自分自身、想像もしていませんでした。

学生時代（中学校、高等学校、大学）は、卓球三昧の日々を過ごしていました。中学校・高校時代は、学校の部活動が終わると、私的なコーチが運営している卓球道場に移動し、夜中まで男子選手と練習をしました。一番多感な時に卓球の漬物になっていて、テレビを見たことがない生活でしたので、その時に流行していたドラマの内容や、アイドルの名前などは全く知らないので、学校では友達との話題についていけず、悲しい思いをしていました。大学卒業の３年後に地元国体が開催されることが決まっていたので、「教員免許を取得して山形に帰る」と親と約束し、東京の大学に進学させてもらいました。大学では定例の練習が終わると、それぞれ個人ごとに秘密の練習場を持っていましたので、相変わらず卓球をしていました。私がお世話になっていたところは、当時の日本チャンピオン、元世界チャンピオンがいるような練習場で、とても刺激的な４年間でした。

今は、仏像や曼荼羅、塔輪、刀剣に興味があり、昨年、東京国立博物館の国宝展には 6 回行きました。川越喜多院五百羅漢や法隆寺宝物館の観音像、京都三十三間堂等には「推し」がいます。

えがおカフェ (メニューの一例)

先生が「教育」で大切にされていることは何ですか？

担当した子どもの将来像を想像すること、そして、担当した１年でなるべく今できる限りの理想像に近づけることを大切にしてきました。『自分が担当していた時はできました』ということは言いません。ずっと担当できる保証はないですし、子ども達は私のところから離れて生活する時間の方ずっと長いわけですから、「私とできる」ではなく、「誰とでもできる」スキルをどうやったら身につけることができるのかを一番大切に考えています。

現在のお仕事について教えてください。

私の名刺の肩書きには、「主幹教諭」の前に、「Garage Café Project チーフ」と書いてあります。昨年度から附属大塚特別支援学校で取り組んでいるプロジェクトです。今年度に入ってから、ガレージのリノベーションが完成し、素敵なカフェに生まれ変わりました。６月からは障害者雇用の２名のスタッフが加わりました。高等部職業科とスタッフとの協業によって、「えがおカフェ」を円滑に運営していくことが現在の私の使命だと考えています。

えがおカフェで大切にしていること、手ごたえを感じることはなんですか?。

えがおカフェのモットーは「みんながえがおになれるカフェ」です。お客様も、働く私たちもえがおになれることを目標にしています。お客様がカフェで気持ちよく過ごしていただけるにはどうしたら良いか。接客態度、清潔感のある店舗、整理整頓や美味しいお菓子を心を込めて作ることなどを、スタッフ一人一人が、その人なりに自分ができることを考えられるようになってほしいと思います。

えがおカフェ (店内の様子)

６月から働いているスタッフは、えがおカフェでの仕事が楽しいと言ってくれるようになってきました。最初は慣れない仕事で戸惑うことが多いようでしたが、苦手なことを自分自身で認識して、協力したり相手に依頼したりすることができることで、この仕事が好き、楽しいと思えるようになっています。そんな姿を高等部の生徒が見て、「自分もこんな風になりたい」と感じてくれるのではないかと期待しています。

カフェで働くスタッフへの支援について、工夫していることはありますか？

金銭の受け渡しは、「レジスター～特別支援学校向けレジスターアプリ～」（岐阜県産業技術総合センター）を使用しています。商品や受け取ったお金、お釣りを確認するという流れが、写真を選択することによって正確に行えます。「〇〇円、お預かりします」等、場面にあった台詞が表記されるので、コミュニケーションや金種について学習途中の生徒でも、正確に早く、簡単にお客様とのやりとりができ、彼らの自信にも繋がっています。

コーヒーは「浸漬式ドリッパースイッチサーバーセット」（HARIO 株式会社）を使用しハンドドリップで淹れています。コーヒー粉をお湯に浸漬してから抽出するドリッパーで、スイッチを押してドリップするので、均一な抽出が可能になります。難しい「蒸らし」や「浸漬」については時間を明確に決めて、砂時計を使用して作業をしています。

道具の名前や使い方を覚えることなど、一からのスタートでしたが、スタッフはゲームの課題をひとつひとつクリアしていくように、できることを増やしています。それが彼ら自身に実感でき、やりがいや「この仕事が好き」という気持ちに繋がっていると思っています。

カフェのお客様はどんな方が多いですか？

グランドオープンしてしばらくは保護者やその関係者等、学内のお客様がほとんどでしたが、最近では地域の方や「Instagram を見てきました」等、学外の一般のお客様の方が多くなっています。二度、三度と訪れてくださる方や、「全部のお菓子を制覇したいの!」と連日ご来店くださる方もいらっしゃいます。地域の方々に愛されるカフェになりたいと思っているので、そんなお客様が増えていることを、とてもうれしく感じています。

うれしいことのもう一つは、小学部や幼稚部の幼児児童が保護者と一緒に来店してくれることです。好きなお菓子、食べたいお菓子を自分で選んで、「マドレーヌください」などと、スタッフに伝えて買い物をする姿が見られます。また、メニューを見て、「たいわんカステラチョコ!」とひらがなやカタカナを読むことができるようになった児童もいます。お金や商品の受け渡しをするときの、お互いに交わす「ありがとうございました」という言葉を聞くたびに、とても幸せな気持ちになります。

知的障害教育の未来についてひとことお願いします。

知的障害教育の未来には、多くの可能性が広がっていると感じています。テクノロジーの進化によって、個々のニーズに応じた支援がより一層充実し、自立した生活を送るためのスキルを身につける手助けが可能になっていくのではと思います。また、地域社会との連携が深まることで、子ども達が多様な経験を通じて社会的なスキルを磨く機会も増えていきます。さらに、インクルーシブ教育の理念が浸透することで、すべての子どもが互いに学び合い、共に成長できる環境が整っていくのではないでしょうか。このような社会の仕組みの一端を担っていることを誇りに感じています。

（聞き手：連携推進グループ　髙津梓）

JICA2024 年度課題研修　インクルーシブ教育実践強化（すべての子どもを支える授業づくり）

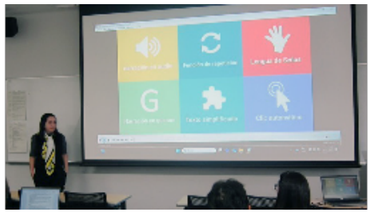
11 月 20 日（水）、筑波大学文京校舎にて、JICA2024 年度課題研究　インクルーシブ教育実践強化（全ての子供を支える授業づくり）を実施しました。

今年度は、ベリーズ、コスタリカ、ドミニカ共和国、エルサルバドル、ニカラグア、パラグアイ、ペルーから、教育省インクルーシブ教育専門官や教師ら 8 名をお迎えしました。

「各障害種別の指導上の配慮と工夫」の講義では、連携推進グループ員がそれぞれの専門性を生かし、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、自閉症の授業づくりのヒントとなる教材・指導法を中心に講義を行いました。

「教材・指導法データベース　英語版」の講義・演習では、一人一人がパソコンを使ってデータベースを閲覧し、どんな教材・指導法に興味をもったか発表してもらいました。また、データベースに掲載されている教材・教具の中からいくつかピックアップして展示し、実際に手に取って確かめたり、体験したりしてもらいました。

講義の様子


研修生の発表

全員で記念撮影

免許法認定公開講座について

本講座は、特別支援教育連携推進グループと学校教育局企画推進課が企画・運営を行い、筑波大学人間系（障害科学域）及び附属特別支援学校（視覚、聴覚、大塚、桐が丘、久里浜）と協力して、特別支援学校教諭免許状（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱）の一種、二種免許状を取得するために必要な講座を提供しています。

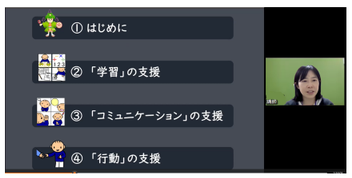
今年度も感染症対策のため、Zoom によるオンライン（リアルタイム）で実施しました。7 月 22 日（月）～ 8 月 3 日（土）、第 1 欄から第 3 欄、全 10 講座（定員 500 名）を開講し、全国各地から 387 名の方々に受講していただきました。また、聴覚障害の方へは、情報保障として要約筆記を提供しました。

聴覚障害の指導の実際

公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」について

11 月 23 日（土）に、筑波大学（東京キャンパス）において、令和 6 年度公開講座「特別支援教育の教材・指導法の基礎」をオンラインで開講しました。当日は全国から通常の学級の先生方、特別支援学級や特別支援学校の先生方、教職を目指す学生等、３４名が参加されました。連携推進グループ員が講師となって、各障害に関する知識や指導法、活用できる教材等について写真や動画を交えて紹介しました。

まとめの時間には三つの小グループに分かれて、講師と参加者が講義内容に関連した意見交換を行いました。参加者からは「学んだことを普段の授業や学級運営に活かしたい。」「資料やデータベース、テキスト類の情報があって、大変参考になった。」等の感想をいただきました。



理解のしにくさのある子どもへの教材・指導法

令和６年度 現職教員研修（指導力向上研修コース）

11 月 5 日（火）～１２月５日（木）の期間に、倉益晶子先生（鳥取県立皆生養護学校）をお迎えし、現職教員研修（指導力向上コース）を実施しました。筑波大学東京キャンパスでの講義の受講や、附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由）での実践実習、附属学校、公立の特別支援学校参観等を通じて、研鑽を深められました。

倉益先生の研修テーマは、「自立活動を主とする教育課程で学ぶ重度重複障害児における教科指導について」で、実践実習では、特に障害の重い子供の算数・数学科の授業づくりについて、中学部の生徒を対象に取り組みました。

「障害の重い生徒が数学的な見方・考え方を働かせるような授業」をどのように考えたら良いのか、実習校の教員と熱心に話し合いを重ねながら、幾度も授業展開を練り直し、教材研究を重ねられました。研究授業では、生徒が「積み木を倒す」という活動を通じて、生徒が思考を深めながら学習に取り組む姿をねらい、授業に取り組みました。授業後の検討会では、数学的な見方・考え方や評価等について活発な協議が行われました。

修了式では、１ヶ月の研修で学んだことを振り返り、今後に向けての抱負を語られました。

勤務校での今後のご活躍を心より期待しております。

開講式の様子

授業検討会の様子

研究授業の様子

修了証書授与の様子

令和６年度　第２回特別支援教育セミナーについて

今年度 2 回目の特別支援教育研究セミナーを開催します。「障害理解のための擬似体験」「ICT 機器を使った実践の紹介」「教材指導法 DB の教材の紹介」「点字名刺の制作」等のワークショップ（参集型）と附属学校教員による講義（オンデマンド型）の 2 部構成になっています。ワークショップの定員は 50 名ですのでお早めにお申込みください。

テーマ

『インクルーシブ教育システムの推進に向けて　～共に学び・つなぐ・附属特別支援学校の実践より～

○対面型ワークショップ　令和 7 年 2 月 22 日（土）

●ワークショップ　●教材・教具・書籍等の展示紹介　●交流コーナー

○オンデマンド配信

令和 7 年 2 月 17 日（月）～　3 月 18 日（火）

筑波大学附属特別支援学校（視覚・聴覚・大塚・桐が丘・久里浜）の現場から

右の QR コードからお申込みください。

なお、申し込み開始は、令和 7 年 1 月１５日（水）からです。

第 1 部　申し込み QR コード

第 2 部　申し込み QR コード

editorial Postscript

編　集　後　記

2024 年も、あと少しとなりました。本号が発行される頃には、全国の先生方も「師走」の如く、年末の業務でお忙しく過ごされていらっしゃることと思います。ホッと一息ついた折に、本号をお手にとっていただけることを願っています。

本号の巻頭インタビューでは筑波大学障害科学域教授の小島道生先生にご登壇いただきました。ご研究分野について、大変分かりやすくお話をいただきました。「人と繋がり、人に感謝できることの幸せ」に気づくことを大切にしたいと思えるようなお話でした。詳しくは、本号をご参照ください。

2024 年は、私達にとって、多くの先生と「繋がる」ことができた 1 年でした。秋には第 1 回特別支援教育研究セミナーをオンデマンド配信で開催し、1000 人を超える方にご参加いただきました。また、教員研修にご活用いただくことを目的として開講したオンデマンド研修コースには、全国各地の学校から多くのお申し込みをいただきました。この 1 年、お世話になった全国の先生方にあらためて、感謝を申し上げます。

2025 年、さらに飛躍できる年となりますよう、私達連携推進グループも精進してまいりたいと思います。

竹田　恵

表紙「Poinsechia」筑波大学附属学校教育局

SNE-T
Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット21 号（通巻 第69）2024 年12 月20 日発行
発行 / 編集 :筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話：03-3942-6923・6937 FAX：03-3942-6938
e-mail：snerc@gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp
https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/snerc/

©2024 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（本誌記事の無断転載を禁じます）